



やかただより

広川町
全戸配布

第105号
令和元年7月

ナミビア共和国駐日大使御来館

アフリカ南西部にあるナミビア共和国駐日特命全権大使のモーヴェン M. ルスウェニヨ氏が



6月9日に来館されました。今年、日本で開催されるラグビーのワールドカップへアフリカ代表として出場するナミビア共和国チームが、大会前に上富田町でキャンプをするそうです。大使は、

その下見に来県された機会に「稲むらの火の館」に来館されたものです。ナミビアでは、これまで津波はもちろん、大きな地震もないそうですが、この機会に理解を深めたいということで、お立ち寄りいただいたものです。大使館の二等書記官と外務省職員が同行されていました。

館内では、西岡町長、松林教育長、西名誉館長と懇談されました。また、大使が来館された時の恒例の芳名録への記帳と大使の森へ記念植樹をしていただきました。今回植樹していただいたのは、「ゴードニアラシアンサス」というツバキ科の常緑樹です。緑色の濃いきれいな葉っぱです。



なお、西名誉館長がかつて世界の国会議員の集まりでナミビアへ行かれたそうで、その時に買ってきた木彫りの人形を持参してきて、話に花が咲いていました。大使は明るく気さくな方でした。帰りには、「また来ます。」と言われていましたので、楽しみにお待ちしております。

今年も大学生の支援で

「こども梧陵ガイド」が !!

平成28年に関西圏の大学生で組織している「次世代防災研究者連盟」のサマーセミナーが、稲むらの火の館で開催されました。そのセミナーの中で提案された「1日稲むらの火の館館長・こども梧陵ガイド」という事業を実現しようということで、それ以来広小学校とすすめてきました。



関西大学近藤ゼミと龍谷大学石原ゼミの学生が先生方と共に来られ、広小6年生と一緒に考え、クイズでガイド

をしようということになりました。それ以来これまで3年間、稲むらの火の館館内で実施して参りました。クイズで、「稲むらの火」「濱口梧陵」「津波防災」等の問題を来館者に出して、答えと共に解説するという方法です。

今年は第4回目ですが、先日両校の学生と先生方が来られ、広小学校で打ち合わせを行いました。本番をそばで見ていると、なかなか難しい問題もあって、おもしろいです。来館のお客様も対応してくれますので、楽しいものです。子ども達がこういう催しで防災の知識を深めるという取り組みは、他所ではあまり見られないようです。

今年の詳細は、追々お知らせいたしますので、大勢の御来館をお待ちしています。

<昭和南海地震の体験談募集>

昭和21年(1946)に起った昭和南海地震・津波の時の体験談をお聞かせください。当地方での一番近い地震・津波です。最近、立ってられない程の揺れだったともお聞きしました。そういうお話を聞かせていただきたいと思います。ご連絡をお願いします。64-1760まで。

『安政聞録』 翻訳文 (その5)

原作・古田 詠処 養源寺蔵

六 回

さて逃げた人はもちろん、昼食より一食も取る事ができていなかった。特にいつもはか弱い人も、怖さのあまり思いもよらない力を発揮して荷物を背負い、あるいは病などどこへいったかのように一生懸命働きし、夜が更けるに従い、どんどん激しい空腹に襲われ、いまにも飢えようとしていた時、法蔵寺で飯をたかせ、おむすびをつくり、みんなへ一つずつ与えていったのは、午前四時ごろであった。「空腹の者は食事をし、のどが渴いた者は飯を」昔の言葉にもあったように、今夜のおむすび一つは、平時の山海の珍味を飽きるまで食するにまさるものであった。これを思えば平時は安泰な世の中にいながら、贅沢をきわめ、酒食に溺れ、食べ物に不満を言うのは実に天下の罪人であるといえよう。恐れ苦しみ天命に任せるべき、これは人たるもの一に心得ておくべき事である。

人は万物の霊長というが、そうであっても天をあなどる時には動物にも劣る。孟子の言にも、「人と禽獣と異なることは、殆んどないとあるが、また飽暖で学ばない時は、これもまた禽獣と似たようなものである。仁義忠孝をつくして後、人間は万物の霊長といえるのである。我が子孫はこのことを決して忘れてはならない。」この一食に大いにのどを潤し、腹を満たして、喜びを神仏に感謝してのち以後の安穩を願い、夜が明けるのを然りたり。さて神仏に願ったが、まず自らを清らかに、心を潔白にして親に孝を君主に忠を尽くし人と交わるときは信義を重んじ、一家睦まじく、商売では高利を貪らず、悪事をしないよう信心をするのはよいことである。しかし聖人も仰っているが、「神に頼らないのが知である」と。しかし我が身は邪な心を持ち行いは正しくないのに、富貴を願い、病難から助かろうとし、自分が幸福になるのであれば、人はどうしても構わぬという心がけで神仏に近づこうとし、神仏を汚す者がいる。これは我が心と我が身を欺くかのようなものである。神仏がどうしてこの願を受け入れて下さるだろう。いったい、神は非礼を受けず、ただ神の前の鏡の

ように正直であるべきである。神は正直者の心に宿るといえるが、そうであるなら神はいるといえればおり、ないといえばない。人間がどうしてこれを知る事ができようか。しからば三日間、他へも参詣しながら、しかし神頼みにはならないことを好しとすべきで、無理な願をしてはいけない。叶うのが難しい願いをかけて御利益がなかった時に、神をそしり、もしくは他の宮へ行って、また同様にいたし、迷うものもたくさんいる。これは神を遊ぶようなものであり、慎まなければならない。

「心さえ誠の信心の道に叶っているなら、お参りに行かなくても神様は守って下さる」これは小さな子供でも知っている唄だが、これを実行している人は実に少ない。間違いない事である。また、ある人の詠んだ歌に「皆がお参りする社に神様はいらっしゃらない、心の中にこそ神様はいらっしゃるのだ」とあるが、明王院にはあり、天災・病気などの他にも、富貴長寿は神さまの及ぶ所ではない。聖人も仰っているではないか「人の生死には天命があり、富貴は天が決めることである」全くその通りであって、善人であってもよいことばかりある訳ではなく、また悪人にも悪いことばかりではない。みな天自然のことであり人力の及ぶところではない。しかしだからといって、君子が常日頃より善をまもり、仁義を道とし深く謹み、戦に勝っても自重するべきであり、それでも災害が起ってしまった時は、天命と諦めるべきだ。取るに足らない人は自らを顧みる事なく、酒に溺れ、自ら病を求め、あるいは金銭を貪り、あるいは君子の心がけに反し、●人といえるだろう。つまり、自らよんだ災いは逃れる事はできないというのはこのことである。ああ、つつしまなければならないことだ。(つづく)

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

*記念館だけの入場は無料です

